

2022年5月1日 復活節第3主日（ヨハネ21：1～14）

イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。

（ヨハネによる福音書21章6節）

今回の箇所には、地名が書かれています。ティベリアス湖畔という聞き慣れない場所です。ローマ帝国がユダヤを統治していた時代、ガリラヤ湖はこのように呼ばれていました。つまり彼らは、ガリラヤ湖の湖畔に戻っていたということです。

イエス様が十字架につけられたのがエルサレムですから、きっと先週の二回はエルサレムのどこかの家に隠れている弟子たちの元に、復活のイエス様が現れたのでしょう。しかし三度目はイエス様が宣教を始めたガリラヤの地でした。イエス様の宣教の中心は、カファルナウムというガリラヤ湖のそばの小さな町でした。そこにいたのは、決して裕福ではなく、日々の暮らしにも疲れ果てていた人たちでした。神さまに見捨てられたと思われていた人たちとイエス様は共に過ごし、神さまの愛を伝えました。そのガリラヤの地に、復活のイエス様が来てくださった。エルサレムという宗教の中心地ではなく、ガリラヤという生活の場にイエス様が来られたということは、わたしたちにとってもとても大きなことです。

さて彼ら弟子たちは、ガリラヤ湖で何をしていたのでしょうか。みんな「復活のイエス様に会えますように」ってお祈りしていたのでしょうか。そうではありませんでした。彼らは魚をとっていたのです。

ささげ物にするわけでもなく、弟子たちは自分たちが食べるために、生活するために魚をとりに出かけていきました。そのことを聞いて、不思議に思われる方もおられるかもしれません。エルサレムで復活のイエス様に出会った彼らです。どうしてエルサレムに留まって、宣教を始めなかったのだろうか。

ルカによる福音書や使徒言行録を読んでいますと、ペトロたちの働きによってエルサレムの教会はつくられていっています。聖霊降臨日の出来事は、ペトロたちが祈っている中に炎のような舌が降りて来て、聖霊に満たされて様々な言語で語り始めた。そこから教会が始まっていったとされます。ところが今日のヨハネ福音書やマタイ福音書では、復活のイエス様と弟子たちがガリラヤで会ったという物語が載せられています。どちらが正しい、どちらが間違っているということではありません。この、「普段の生活の中に来られる」ということが大事なのです。

わたしはこういうことを聞かれます。いつ、どこで、どのようにお祈りをするのがいいのでしょうか、と。祈り書には朝の祈りや夕の祈り、そして就寝前の祈りというものが載せられています。また諸祈祷というページには、様々なときに祈る祈りが載せられています。ですからどうしても、「祈り」イコール「決められたもの」というイメージがあるのかもしれませんが。

決められた時間に、決められた場所で、決められたお祈りをする。別にそのことを否定するつもりはありません。エルサレム神殿はユダヤの人々にとって、とても大事な場所だった。それはまぎれもない事実です。しかし神殿で決められた祈りをしないと神さまが聞いてくださらないのだとしたら、どうでしょう。神殿はわたしたちにとっては、礼拝堂と置き換えることが出来ると

思います。この礼拝堂という場所を、特別な場所として大切に
する。それは意味のあることでしょう。でもそこだけに目を向けて
しまうと、わたしたちは大変な間違いを犯してしまうのです。

2年前の今ごろ、わたしたちは教会に集うことができませんで
した。新型コロナの影響で全国に緊急事態宣言が出され、教会は
礼拝を休止するという決断をしました。教会に行きたくても行く
ことができない。その現実がわたしたちの前にはありました。
でもそのときに、わたしたちは同時に気づいたはずです。たとえ
コロナがなかったとしても、年齢や、体調や、仕事などで、どれ
だけたくさんの人たちが教会から足が離れ、祈ることのできな
い毎日を過ごしていたのかということ。教会に来ることので
きないお一人おひとりを、わたしたちは心に覚えているのか、そ
のことを突き付けられたように思います。

先ほどの話、いつ、どこで、どのようにお祈りをするのがいい
のでしょうかと聞かれたとき、わたしはよくこのように答えま
す。いつでも、どこでも、どのようにお祈りいてもいいですよ。
たとえば電車に乗っていて吊革につかまっているときに、ふと
誰かのことが気にかかる。そのときに心の中で、「神さま、聞いて
ください」、これもお祈りですよ。たとえばどうしようもなく
孤独を感じ、疲れ果て、もう神さまからも見捨てられたと思えた
とき、心の底から「神さま、何ですか」と叫ぶ。それもまたお
祈りなんですよ。そうやって答えます。

それは復活のイエス様がガリラヤにも来てくださったからで
す。エルサレムだけではなく、ガリラヤという、人々が泣き、笑
い、痛み、苦しみ、毎日を過ごしているその日常にきてくださ
ったからです。だからイエス様はわたしたちが今、生活している、
生きているこの場所にも来てくださるのです。そのことを聖書

はわたしたちに伝えているのです。

しかし、この場面、面白いなあって思いませんか。最初イエス
様が岸に立っていたとき、弟子たちはそれがイエス様だとは気づ
けなかったそうです。でも「舟の右側に網を打ちなさい。そう
すればとれるはずだ」という言葉通りに網を打ったところ、153
匹もの魚がとれた。そのときに弟子の一人が、「あれはイエス様
だ」と気づいたのです。わたしたちにもありませんか。何気ない
日常の中で、普段は見過ごしていたような小さな出来事が、実は
神さまの恵みであったということ。あとから思い返すと、あの
とき確かにイエス様が一緒にいてくださったに違いないという
こと。わたしたちはその繰り返しの中で、生かされているのです。

気づかないうちに、何度もわたしたちの日常の中にイエス様
は来てくださり、わたしたちを起こし、導いてくださるのです。

さて、弟子たちのところに来られたイエス様は、そのときに何
をされたのでしょうか。これまたホッとすることが書かれてい
ます。炭火をおこし、魚をその上にのせ、さらにパンも用意した
というのです。そして、朝食と一緒に食べるのです。わたしはこ
の場面を想像するたびに、とても楽しくなってしまいます。だっ
てイエス様が、一緒にムシャムシャ食べてくれるんです。

イエス様はご復活なされました。それは、わたしたちがこの日
常を、イエス様と共に歩むためです。重荷を負っているときには
一緒に背負い、泣いているときには一緒に泣き、そして喜びの中
では一緒に大喜びされる。そのイエス様と出会いましょ。

そしてイエス様を心からお迎えし、歩んでいきたいと思いま
す。神さまの豊かな祝福が皆さまの上にありますように、そして
わたしたちのすぐそばにいる人たちの上にも、神さまの愛が伝
えられますように、お祈りしてまいりましょ。